

原爆ドームの来歴とヤン・レットル

——日＝チェコ文化交流史の視点から——

矢田部 順 二

はじめに——問題の所在

1. 広島県物産陳列館の建設とその設計者
 - (1) 戦前の広島と物産陳列館計画
 - (2) レットルと日本
2. 産業振興への寄与と被爆後の残骸という対称
 - (1) 物産陳列館としての活躍
 - (2) 平和記念碑としての戦後
3. 原爆ドーム設計者としてのレットルの復権
 - (1) 日本における言及
 - (2) チェコにおける言及

おわりに

はじめに——問題の所在

第二次世界大戦が終結して70年目の2015（平成27）年は、被爆建物の象徴的存在である原爆ドームにとっても大きな節目の年であった。戦後廃墟と化し原爆ドームと呼ばれるようになった建物は、その起源を1915（大正4）年4月5日に竣工した広島県物産陳列館に遡ることができ、すなわち2015年はこの建物の竣工から100周年だったからである。

ところで、原爆ドームの設計者が、チェコ人の建築家であることは、日本でもかなり知られるようになった事実であろう¹⁾。広島県物産陳列館の

1) 本稿における「チェコ」は1918年10月28日までオーストリア＝ハンガリー二重王国の一部であり、独立から1992年12月31日まで「チェコスロヴァキア」としてチェコ人とスロヴァキア人の共同国家であったが、1993年以降、分離独立してチェコ共和国となった国家を指す。

設計者はチェコ出身のヤン・レツル（Jan Letzel, 1880-1925）という当時30代半ばの若い建築家であった。

当然のことながら、レツルは自分の建築作品がのちに負の世界遺産になることを予期していたわけではない。しかし、竣工から30年目にして戦争の惨禍で廃墟となり、記念碑として遺ることになったことで、皮肉にもレツルの名前は歴史に刻まれることになった。ただし、原爆ドーム設計者レツルの名前は、一度は忘れ去られた時期があった。レツルが日本から母国チェコへ帰国し、そして戦時色が強まった時期、さらには焼け跡から復興がめざされた時期、人々は原爆ドームの設計者にまで関心を払ってこなかった。チェコにおいてもこれは同様で、若くして亡くなった建築家の海外での業績について戦間期に関心が払われることはなく、第二次世界大戦後も、体制の異なる日本の原爆遺構がチェコ人建築家の作であることなど、関心の外のできごとだった。

本稿は原爆ドームの来歴とレツルについて、あらためて概観しながらレツルの名前が再認識されてきた過程をまとめることを目的とする。以下でも触れるように、このテーマについてはすでに建築史などの立場から多くの言及がある。戦後、廃墟の構造物としてその姿を晒すことになった建物は、どのような経緯で何のために建てられたのか。その建物は広島に何をもたらしたか。そもそも東欧のチェコからなぜレツルは日本へ、そして広島へ来たのか。国際平和文化都市として戦後の歩み続ける広島において原爆ドームは何を見つめて来たのか。多くの論考がこうした関心に注意を払ってきた。

本稿に何らかの意味があるとすれば、それはこのテーマに関する研究史を鳥瞰し、日＝チェコ交流史の一端を紹介して、近年の動向にも触れることであろう。東欧のチェコと広島を繋ぐ一つの建物の数奇な運命を通して、日本やチェコの社会においてこの建物とレツルはいかに表象されてきたのかを素描していきたい。

1. 広島県物産陳列館の建設とその設計者

(1) 戦前の広島と物産陳列館計画²⁾

20世紀になったころの日本は、日清戦争（1894－95年）、日露戦争（1904－05年）を戦い、大陸進出を国家目標としていた。この時期、広島は軍都広島として発展を続けた。広島城には広島大本営がおかれ、現在の広島県庁や広島県立体育館、そごうデパートなど基町の一帯には、日本軍の練兵場があった。宇品港は重要な軍港となり、ここを出発して中国大陸に渡った師団や連隊も多かった。第二次世界大戦においても、広島は南方へ向け兵隊を送るひとつの大きな拠点であった。

広島の発展ぶりは人口の増加からもうかがえる。江戸時代末期の1820年ごろの広島城下の人口は7万人前後と推計されるが、市制町村制の導入にとまって1889（明治22）年に市制が施行された戦前の広島市の人口は、83,387人であり、京阪神以外の西日本で最大だった³⁾。1920（大正9）年には305,773人、1930（昭和5）年には382,697人となり、1940（昭和15）年には、463,670人を数えた⁴⁾。これは市制施行時の1889（明治22）年を1とすると、約30年間で3.67倍、50年間で5.56倍の増加である。1980（昭和55）年から2010（平成22）年まで30年間の増加率が18%増であることと比べれば、その発展がいかに急速なものであったか想像がつく。

このように広島が中国地方でも政治・経済・文化・軍事の中心都市に成長すると、都市への人口集中もあり、雇用創出の必要性からも産業の振興が行政の重要な課題となった。そこで広島県内の産業振興をねらって、物産陳列施設の建設を求める声があがり、県議会でも1903（明治36）年に県

2) 本稿では、第二次世界大戦以前の軍都としての広島を指す場合に旧字の広島を使う。

3) 広島市ホームページ：広島の歴史〈URL：http://www.city.hiroshima.lg.jp/www/contents/1111373388687/index.html〉

4) 広島県ホームページ；統計情報〈URL：https://www.pref.hiroshima.lg.jp/site/toukei/kokuseityosa.html〉

予算による物産陳列施設建設の意見書が議決された⁵⁾。

その後1911（明治44）年、宗像政（むなかたただす）知事時代に建設地の埋立造成工事が始まった。後任の中村純九郎知事は建物の総工費を19万円とする予算を決定した。この額は当時としては破格であり、広島市以外の県議会議員から異論も唱えられたが、山間地域の農業振興策などを見返りに広島県物産陳列館構想は進められた⁶⁾。

1913（大正2）年春に宮城県知事から広島県知事に転入してきたのが寺田祐之であった。寺田知事は前任者たちが準備した広島県物産陳列館の建設をさらに強力に推進した。この寺田知事が物産陳列館の設計者に指名したのが、旧知のヤン・レツルだった。

寺田が宮城県知事を務めていたころ、宮城県では当時増加しつつあった外国人観光客を日本三景のひとつの松島に誘致しようと、ホテル施設の建設計画がもちあがった。寺田は、北村重昌精養軒主の勧めもあって当時東京を中心にホテルやレストラン建築に業績のあったレツルに設計を依頼した⁷⁾。1913（大正2）年に「県営松島パークホテル」は竣工したが⁸⁾、寺田知事は外観が擬和風で内装が洋風というこのホテルを気に入っていたといわれる。その縁で広島県物産陳列館の設計はレツルに託されたのである。

着工から4年の歳月を経て1915（大正4）年4月広島県物産陳列館は完成した。煉瓦造り、外装モルタルおよび石材仕上げで、地上3階一部5階建て、地下1階、建築面積は約千平方メートルで高さは25メートルほどあった。物産陳列館の北側には日本軍の練兵場が拡がり、建物の周囲は木造の家屋がほとんどであったから、屋上にドームを抱いた洋風の建築物は、市内でもひときわ目立つ建物であった。

5) 朝日新聞広島支局（1998）p. 66。

6) 佐藤重夫（1968.10）pp. 819-820。佐藤・椋代（1969.3）pp. 14-15。

7) 精養軒は明治期の日本に本格的な西洋料理を紹介した草分け的存在であり、レストラン事業のほか、当時ホテル事業にも携わっていた。

8) 松島パークホテルは、1969（昭和44）年3月2日に火災により焼失した。

(2) レットと日本

ヤン・レットは1880（明治13）年9月4日、当時はまだオーストリア＝ハンガリー二重王国の版図であった現在のチェコとポーランドの国境近くにある一地方都市、ナーホトに生まれた。ホテル経営者のヤン・レットと母ヴァルブルガの間にできた7人兄弟の6番目で三男だった⁹⁾。

レットが生まれたナーホト市は近年の人口が2万人あまりとボヘミア地方の小都市であるが、ポーランドへの交通の要衝として13世紀には町が形成された歴史をもつ。レットの家系は市の中心に位置する広場に面したホテルを代々経営していた。

レットは、世紀転換期に高校・大学で建築を学んだ。ナーホトに近いバルドゥビツェの工業高校を卒業後、1901（明治34）年から4年間、レットはプラハ芸術工科大学（現プラハ工芸大学）において、チェコ近代建築の父と称されるヤン・コチェラ（Jan Kotěra, 1871-1923）に師事した。レットが建築を学んだコチェラはウィーン分離派（セセッション）の中心人物のひとりだった建築家オットー・ヴァーグナー（Otto Wagner, 1841-1918）の弟子であり、コチェラもセセッション様式の建築をプラハに残している。

この時代、中欧では分離主義（セセッション）が文化活動において注目されていた。セセッションとは世紀末の1897（明治30）年にウィーンでグスタフ・クリムトらの芸術家グループが打ち出した新しい造形表現のことで、分離派というのは過去の様式からの離別を意味している。芸術や建築活動に機能性や合理性を追求し、優美で官能的な表現で知られた。

またこのころ、1889年（明治22年）と1900年（明治33年）のパリ万国博覧会では日本文化ブームが起きるなど、ヨーロッパでは日本趣味（ジャポニズム）が流行していたが¹⁰⁾、セセッションはその表現の中に東洋の文様

9) レットは父親と同名だったことになる（朝日新聞広島支局（1998）p. 62）。

10) ジャポニズムは日本の開国以降、浮世絵や美術工芸などが広く西欧にも知られるようになり、それがヨーロッパの芸術家に大きく影響を与えたことをいう。

をも大胆に取り入れた。

このような時代と教育の影響をレツルは自らの建築スタイルに取り込んでいったと思われる。プラハ芸術工科学校の卒業後、イタリアへの遊学を経てレツルは1905（明治38）年からプラハのクイド・ビェルスキー（**Quido Bělský**）建築事務所に就職した。このころレツルはプラハのヨーロッパ・ホテル（**Grand Hotel Evropa**）の内装や、プラハの北東30キロにあるムシエネー温泉の会館施設の設計を手がけている¹¹⁾。この温泉施設の銘板にはレツルの名とともに梅に鶯の図柄と古代エジプトの日輪が残されており、レツルがセセッションとともにジャポニズムの影響を受け東方への憧憬を抱いていたことが窺われる。

レツルは1905（明治38）年の秋以降、エジプトの宮廷建築家ファブリシオ・パシヤ（**Fabricio Pascha**）建築事務所に転職し、そのカイロにおいて日本とつながりのあるゲオルグ・デ・ラランデ（**Georg de Lalande**, 1872-1914）と知り合ったといわれる¹²⁾。そしてデ・ラランデの建築事務所に加わるため、レツルは明治期末期の1907（明治40）年に来日した。レツルはその後この事務所で出会ったチェコ人のカレル・ヤン・ホラ（**Karel Jan Hora**, 1881-1974）とともに1909（明治42）年に独立して「レツル・アンド・ホラ合資会社」を興し、数々の建築作品を手がけていった。このころのレツルの建築作品については、菊楽忍の論考に詳しい。表1は菊楽のまとめた日本におけるレツルの建築作品一覧中、レツルの関わりが確認された主要な建築作品をまとめたものである¹³⁾。

ちなみに、共同経営者のホラは竹本福という日本女性と結婚した。ホラはレツルとの合資会社を1913（大正2）年に解散して、上海へ渡り、その後福とともに帰国した。

11) この会館は現在では、「カフェ・レストラン・レツル」として営業されている。

12) デ・ラランデは、神戸の風見鶏の館として知られる旧トーマス邸などを残した。

13) 菊楽 忍（2012）pp. 19-25。

このときレットは日本に残り、1913（大正2）年竣工の松島パークホテルの設計をおこなった¹⁴⁾。ホラとの合資会社を解散してレット建築事務所を立ち上げたころ、レットは寺田知事から広島県物産陳列館の設計を依頼されたのであった。

1915（大正4）年の広島県物産陳列館竣工後、レットは1917年（大正6）に宮島ホテルも設計したが、第一次世界大戦下、オーストリア＝ハンガリー二重王国は日本の敵国となり、レットへの仕事の依頼も激減したという。第一次世界大戦が終結したのちは、1919（大正8）年8月に前年独立したチェコスロヴァキア共和国の在日公使館の臨時商務官となり、建築作品を残すことはなかった。

1920（大正9）年3月には一時帰国し、商社の日本駐在員として1922（大正10）年11月に再来日したが、1923（大正12）年の関東大震災に遭遇し、自分が関わった多くの作品が損傷・焼失するさまを目の当たりにして、同年11月、失意のうちに帰国した。プラハにあった日本の商社鈴木商店に務めたものの、体調を崩し、1925（大正14）年に45歳で死去した。関東大震災やその他の災害などで失われたことで、日本にあるレットの建物で現存するのは原爆ドームと聖心女子学院正門のみである。

建築家としてのレットは、和風建築の装飾を洋風建築の中に取り入れ、融合させることを得意としたが、耐震強度などの面では日本の地震や台風には耐えられない建物が多かった。煉瓦積み原爆ドームが残ったのも、ほぼ爆心地点ということで、横風に晒されなかったためといわれる。しかし物産陳列館が残骸として残ったことから、彼の名前は後世に残ることとなった。現在、レットの故郷のナーホトには、2003（平成15）年に校名変更がおこなわれた結果、彼の名を冠した工業高等専門学校が存在している¹⁵⁾。

14) 松島パークホテルは1969（昭和44）年まで現存したが、火災で焼失した。

15) Vyšší odborné školy stavební a Střední průmyslové školy stavební arch. Jana Letzela「建築家ヤン・レット建設高等専門学校・建設中等工業学校」〈<http://www.voss-na.cz>〉

表1 レツルが日本で設計した主要な建築物

| | 名 称 | 場所 | 計画 | 設計 | 工事 | 竣工 |
|----|--------------|---------|----------|------|---------|---------|
| 1 | ドイツハウス | 横浜 | | 1907 | 1907 | |
| 2 | 京都 YMCA 会館 | 京都 | | | 1908 | |
| 3 | デ・ラランデ邸 | 東京 | | | | |
| 4 | 寺内子爵邸 | 東京 | | 1908 | | |
| 5 | 早川邸 | 東京 | | 1908 | | |
| 6 | 聖心女子学院本館 | 東京 | 1908 | 1909 | | 1909.12 |
| 7 | 雙葉高等女学校校舎 | 東京 | 1909 | | 1909.10 | 1910春 |
| 8 | 大日本私立衛生会 | 東京 | 1909 | 1909 | 1909 | 1911.6 |
| 9 | 長與男爵邸 | 東京 | 1909 | | 1909 | 1910.5? |
| 10 | 雙葉会・小学校・寄宿舎 | 東京 | 1909.12? | | | 1911秋? |
| 11 | 暁星中学校校舎 | 東京 | | | | 1910春 |
| 12 | プライアン邸 | 東京 | | 1910 | | 1917? |
| 13 | 上智大学校舎 | 東京 | 1910 | | 1913.9 | 1914秋 |
| 14 | 関口台教会のルルドの洞窟 | 東京 | | | 1910 | 1911.5 |
| 15 | 雙葉・聖堂 | 東京 | 1911.3 | | 1911.3 | |
| 16 | 墓石 | チェコ・ブルノ | | | | |
| 17 | 築地精養軒ホテル改装部分 | 東京 | 1909? | | | 1911? |
| 18 | 宮城県営松島パークホテル | 宮城 | 1911.9 | 1912 | 1912.4 | 1913.8 |
| 19 | 広島県物産陳列館 | 広島 | 1913 | 1913 | 1914.1 | 1915.4 |
| 20 | 宮島ホテル | 広島 | 1913 | | 1916.4 | 1917.7 |
| 21 | 上野精養軒ホテル | 東京 | | | | 1917? |
| 22 | 東京ステーションホテル | 東京 | | | | 1915.11 |

菊楽 忍 (2012) 「ヤン・レツル再考——書簡集から建築活動をたどる」『広島市公文書館紀要』25 : p. 25により筆者作成

2. 産業振興への寄与と被爆後の残骸という対称

(1) 物産陳列館としての活躍

原爆被害の残骸としての姿の方が生きた建物の歴史をはるかに上回る原爆ドームであるが、戦前の広島県物産陳列館は、広島市の象徴的建物として30年間、広島経済発展の成果や文化活動の中心的役割を果たしてきた。1921（大正10）年、物産陳列館は、「広島県商品陳列所」と改称され、さらに1933（昭和8）年には、「広島県産業奨励館」と改称されたが、少なくとも1930年代前半までは比較的自由的な雰囲気のもと展示会が行われていたらしい。

菊楽の記事にもあるように、この建物の本来の目的は広島県で生産された物産の陳列にあったが、同時に美術展の開催場所になるなど、中四国地域における文化活動の中心地となった¹⁶⁾。また菊楽がまとめた「広島県物産陳列館年表」によると、展覧会、品評会、展示即売会と名のつく催しだけでも30年間に180回ほどを数えることができる¹⁷⁾。

1960年代に原爆ドームの保存運動が本格化し、レツルの助手を務めた市石英三郎氏や詩人の藤田文子氏が1960年代末にレツルの名前を出すまで、この建物の設計者は、第一次大戦時に捕虜となったドイツ人技師であるとの説が一般には流布していたという。これは1919（大正8）年3月に似島独逸俘虜製作品展覧会が開催され、大好評を得たこととも関係しているのかもしれない。いずれにしても会館業務が活況を呈するのとは裏腹に、設計者の名前は人々の記憶から薄れていった。

展示会は美術展などのほかに食文化の紹介をも含み、その中にはカール・ユーハイム（Karl J. W. Juchheim, 1886–1945）が日本において初めバウムクーヘンを紹介した、というものがあった。この成功を得て、ユーハイムは横浜に店を開き、関東大震災ののち、神戸に移り住んで1945（昭和

16) 菊楽 忍（2010.9.1）。

17) 広島県立美術館（2010）pp. 9–12。

20) 年、日本の敗戦1日前に亡くなるまで、日本で菓子を作り続けた¹⁸⁾。

しかし1937(昭和12)年に日中戦争が始まり、しだいに日本が軍国主義の姿勢を強めるにつれ、この建物の役割も国家統制色の強いものになっていった。1941(昭和16)年暮れに太平洋戦争が始まったあとも1943(昭和18)年まで展示会行事はおこなわれたが、「軍艦献納画展覧会」や「聖戦美術傑作展」といった国民の士気を鼓舞する催しであった¹⁹⁾。

そして戦況が苦しくなった1944(昭和19)年3月末以降、産業奨励館は業務を停止し、公官庁や統制会社が入居する建物となり、この建物が本来めざした役割は失われた。こうして、この建物は1945(昭和20)年8月6日を迎えたのである。

(2) 平和記念碑としての戦後

原子爆弾によって一瞬にして廃墟になった旧産業奨励館は、1950年代の初めごろから原爆ドームと呼ばれるようになった。被爆後の広島では、戦後の一時期、原爆ドームの早期撤去を望む声が強かったといわれる。惨たらしい惨禍を思い出したくない、忘れたい、という心情に基づくものだった。被爆者にとっても組織的な行政の支援が整備されなかった戦後10年あまりの歳月は、空白の10年と言われ、後遺症とともに差別にも苦しむ日々だった。この時期、原爆ドームは撤去されることもなく放置され、廃墟として風化するに任されていた。

被爆後の広島市は一面、焼け野原が広がったが、復興計画が立ち上げられる中で、被爆直後から原爆ドームが面する元安川対岸の中島町一帯は、公園化されることとなった。爆心地はグラウンド・ゼロと呼ばれ、占領軍の興味を引いたという。占領軍から復興計画に加わった広島市復興顧問のジョン・D・モンゴメリー(John David Montgomery)や英連邦軍所属のオーストラリア人少佐S・A・ジャーヴィー(Stanley Archibald Jarvie)も、

18) 佐藤林平(1992) pp. 78-86。

19) 広島県立美術館(2010) p. 12。

爆心地一帯の保存を提唱し、原爆ドームについても保存する意見を具申した。広島平和記念公園が設置された経緯は、本稿のテーマではないが、1949（昭和24）年8月6日に施行された「広島平和記念都市建設法」に基づいて、平和公園の設置が決まったとき、公募によってこの公園の設計を担当することになった丹下健三は、慰霊碑から原爆ドームの遠景を直線で結び、平和公園の構図に原爆ドームを取り込んだのであった²⁰⁾。

戦後の広島市長として、広島の復興に深く関わった一人に濱井信三がいる。濱井は、1947（昭和22）年4月から1952（昭和30）年4月までと、1959（昭和34）年5月から1966（昭和42）年5月までの計16年間、広島市長の職にあった。この濱井も市長一期目には、原爆ドームの保存については決定を先送りし、予算をかけてまで原爆ドームを保存する必要があるのかと懐疑的であった²¹⁾。保存問題を先送りする姿勢は第一期濱井市政のあとを継いだ渡辺忠雄市長にも見られたが、このころ渡辺在任中の1953（昭和28）年11月、原爆ドームは広島県から広島市へ譲与された。

風雪に晒されたまま朽ちる一方であった原爆ドームについて、保存が積極的に議論されることになった契機は、1960（昭和35）年春に16歳で急性白血病のため亡くなった楳山ヒロ子（かじやま）が遺した日記であるといわれている。楳山は「記念碑に書かれた文字だけとあのいたいたい産業奨励館だけがいつまでもおそるべき原爆を世にうったえてくれるだろうか」と日記に書いた。この一節が楳山の死後、同級生たちを動かし原爆ドームを保存するための募金活動が組織され、その支持はやがて全国的な原爆ドームの保存運動へと拡大した。

ここまでの行政の対応は、けして迅速ではなかったが、こうした世論の動きを踏まえ、二期目の市長職にあった濱井は原爆ドームの永久保存に方針転換した。一般からも保存支持募金を募り、佐藤重夫広島大教授の強度

20) このあたりの経緯は以下の文献が詳しい。顛原澄子（2016）pp. 60-104。また、中川利國（2015）。

21) 顛原澄子（2016）pp. 127-104。

調査の結果も出て、1966（昭和41）年7月11日、広島市議会は全会一致で永久保存方針を決定した。その結果、1967（昭和42）年には第一次補修工事がおこなわれた。

このころようやく、ドームの設計者はヤン・レツルというチェコ人建築家であるという事実が公になった。次章で触れるように、原爆ドーム保存工事に携わった佐藤重夫広島大学名誉教授やドームの保存運動に関わった詩人の藤田文子らによって、設計者レツルの名前は復活することとなった。

補修工事は1989（平成元）年にもおこなわれた。その後、日本が世界遺産条約（1972年調印1975年発効）を1992（平成4）年に批准すると、文化遺産や自然遺産とともに、現代史の負の遺産として原爆ドームを世界遺産登録する声が上がった。当初、文化庁は世界遺産登録の対象は100年以上の前の文化財にするべきであると難色を示した。背景にはアメリカを刺激したくない日本政府の立場があった。事実、政府が推薦を決めた1995（平成7）年以降、アメリカと中国は原爆ドームの世界遺産登録に反対を示したが、1996（平成8）年暮れにメキシコでおこなわれた世界遺産委員会において原爆ドームの世界遺産登録が可決された。表2はこの建物の竣工から現在までのおもな歩みをまとめた略年表である。

表2 原爆ドームの歩み（略年表）

| 日付 | できごと |
|-----------------------|------------------|
| 1915.4.5 | 広島県物産陳列館竣工 |
| 1915.8.15 | 広島県物産陳列館開館式 |
| 1921.1.1 | 広島県立商品陳列所に改称 |
| 1933.11.1 | 広島県産業奨励館に改称 |
| 1944.3.31 | 会館業務を廃止 |
| 1945.8.6 | 被爆 |
| 1953.11.14 | 広島県、広島市に原爆ドームを譲与 |
| 1950年代後半～ 1960年代初頭 | 存廃論議 |

| | |
|-------------------|--------------------------------|
| 1966. 7. 11 | 広島市議会永久保存決定 |
| 1967. 4. 10-8. 5 | 第一次補修工事 |
| 1989. 10. 31-4. 6 | 第二次補修工事 |
| 1993～ | 世界遺産登録の議論，遺産化署名運動 |
| 1995. 9. 28 | 日本政府，原爆ドームを厳島神社とともに世界遺産に推薦 |
| 1996. 12. 5 | 世界遺産委員会投票，広島平和記念碑（原爆ドーム）世界遺産登録 |

* 広島県立美術館（2010）『広島から広島 ドームが見つめ続けた街』展図録』
pp. 110-111により筆者作成

3. 原爆ドーム設計者としてのレツルの復権

(1) 日本における言及

このように、旧産業奨励館が廃墟になり、原爆ドームとして保存が決定されるまでには21年の年月を要した。この間、日本は米国による占領期を経て、1951（昭和26）年のサンフランシスコ講和条約の結果、翌1952（昭和27）4月28日、条約の発効によって主権を回復した。さらに1956（昭和31）年10月の日ソ共同宣言によりソ連との国交を回復し、同年12月、日本は国連加盟を果たした。国際関係は第二次世界大戦後、米ソ超大国の冷戦の時代に突入したが、戦後日本の外交は冷戦期の緊張状況に大きく影響されてきた。原爆ドームが示す被爆の実相は、冷戦期における恐怖の均衡の源泉となった核兵器の問題に関わるだけに、廃墟としての戦後も冷戦の動向と無縁ではなかった。

国際関係に翻弄された状況は、レツルの母国チェコについても同様だった。チェコは第一次世界大戦後、スロヴァキア人と共同してチェコスロヴァキアとしてオーストリア＝ハンガリー二重王国から独立した。しかし国内に抱えたドイツ系少数民族（ズデーテン・ドイツ人）問題が口実となり、1930年代末にナチス・ドイツの侵略を受けた。第二次世界大戦後のチェコスロヴァキア共和国には戦前の流れを汲む亡命政権が帰還し、独立を回復したが、冷戦が本格化した1948（昭和23）年2月には社会主義政権

が誕生し、共産化した。ソ連のスターリンが存命中、チェコにはソ連型の社会主義システムが確立され、1960年代の半ばになってようやく社会主義の改革運動が始動した。これは1968（昭和43）年の「プラハの春」に結実したが、制限主権論のもと、この改革運動はソ連を中心とするワルシャワ機構軍の戦車によって潰えた。

第一次大戦後のチェコスロヴァキアの独立後、日本はチェコと国交を結び、互いに在外公館を交換している。ただ、戦前のナチス・ドイツによる共和国解体で外交関係は消滅し、第二次世界大戦後は日本の敗戦によってプラハにあった日本大使館は閉鎖され、両国の国交回復は、日本が国連に加盟したのち、1957（昭和32）年のことだった。

上述のように、戦前の広島では物産陳列館の設計者が誰なのか、建物の竣工から10年、レツルが母国で死去したのち、その記憶は曖昧になっていた。さらに建物が原爆ドームになってからも両国関係は10年あまりに渡り、冷戦下で人の行き来が遮断される状況が続き、原爆ドームの設計者の手がかりを得るすべは絶たれていた。これに風穴が開くのは、国交が回復した翌年の1958（昭和33年）年以降、ソ連におけるフルシチョフ政権誕生後の「雪解け」のもと、例えば政府給費奨学生制度により日＝チェコ間でも若手研究者等の交換がおこなわれるなど、少しずつ人的交流が再開してからのことだった²²⁾。

日本において、設計者としてのレツルの名前が刊行物に載るようになったのは、原爆ドームの保存が広島市議会で正式に決定され、保存工事がおこなわれたころからである。保存工事に携わった佐藤重夫がレツルに言及したのは1968（昭和43）年であった²³⁾。また同年にはレツルの事務所で助手を務めていた市石英三郎も『建築雑誌』に投稿しレツルの仕事ぶりなど

22) 国交回復直後に日本からチェコに留学した学生の中には、チェコ語研究の第一人者であった千野栄一や、のちに『原爆ドーム、ヤン・レツル三部作』を上梓した劇作家の村井志摩子、さらにバイオリニストの黒沼百合子等がいた。

23) 佐藤重夫（1968. 10）pp. 819-820。

を紹介している²⁴⁾。ただ、このころのレツルに関する情報は断片的かつ不正確であり、これを正したのが、当時若手詩人であり、原爆ドーム保存運動にも携わった藤田文子であった²⁵⁾。村井志摩子によれば、藤田はレツルを知るために私財を投じて、チェコに渡り、関係者を訪ね、ナーホトの文書館も訪れたというが、折からプラハの春改革運動が挫折したのち、藤田は体制「正常化」のもとで調査を断念し、日本に帰国せざるを得なかった²⁶⁾。またこのころはレツルの他の業績についてまで明らかになることはなかった。

レツルに関する言及がつぎに散見されるようになるのは、管見するかぎり1980年代に入ってからである。それは史実を元にした創作からのアプローチだった。劇作家村井志摩子の戯曲が発表され、これはのちに三部作の戯曲集にまとめられた²⁷⁾。さらにNHKのドラマ・プロデューサーであった佐々木昭一郎による活動もあった。佐々木はチェコのニュースキャスターでありドキュメンタリー作家だったオルガ・ストルスコヴァー (Olga Strusková) からレツルの日本における活動を聞き、1980年代半ばから、チェコテレビとの共同制作で「鐘のひびき～プラハからヒロシマへ」(1988(昭和63)年放映)やレツルを主人公にした「ヤン・レツル物語～広島ドームを建てた男～」(1991(平成3)年放映)などの作品を仕上げた²⁸⁾。こうしたテレビドラマや報道により、レツルの存在はより一般に広く知られるようになった。

1989(平成元)年の春から暮れにかけて、東欧の社会主義諸国は相次いで体制転換し、これは東欧革命と呼ばれた。チェコでも11月にビロード革

24) 市石英三郎 (1968. 10) pp. 14-15。

25) 藤田文子 (1969. 3) p. 11, 藤田文子 (1969. 8) pp. 186-188。

26) 広島市市民局平和推進室編 (1997) p. 12。

27) 村井は、1980年代から自らの戯曲作品の中で、レツルと原爆ドームについて言及する作品を発表してきた (村井志摩子 (1997) pp. 187-190)。

28) このドラマののち、ストルスコヴァーは佐々木の監訳により『レツルの黙示録』を1995年に日本で出版している (オルガ・ストルスコバ (1995))。

命がなり、社会は民主化された。こうした変化は2つの側面からレツル研究を促進したといえる。第1には、体制転換により一層、日＝チェコ両国間の人的交流が容易になったこと、第2に社会主義時代には困難だった歴史の見直しが進み、過去の国外におけるチェコ人の活動にも関心が高まったことである。

このような環境変化のもと、日本では原爆ドームの世界遺産への登録気運が高まり、建築史の立場からこれまでより詳細なレツル研究や物産陳列館研究がまとめられるようになった。その代表格が菊楽忍による研究である。菊楽は広島平和資料館学芸課に勤務する傍ら、現地調査等をおこない、レツルの足跡を追ってきた。参考文献表に示すように、本稿も菊楽の論考に多くを負っている²⁹⁾。

また建築史家藤森照信による言及や、近年では杉本俊多による論考も生きた建築としての物産陳列館を考えるものとなっている³⁰⁾。さらに、世界遺産登録を記念して広島市から刊行された『原爆ドーム世界遺産登録記録誌』(1997)や広島県立美術館の企画展「広島から広島 ドームが見つめ続けた街」展において作成された図録は、この建物の歩みとレツルの役割を考えると、必読の資料であろう³¹⁾。市井の歴史研究家、吉澤玲子は10年以上の調査を経て、レツルの同僚であったホラの日本人妻竹本福の生涯を追う著作を著し、その中でレツルに言及した³²⁾。

そして建物竣工100年、被爆70年を経て、2016(平成28)年には若い世代の研究者からこの問題に関するより詳細な業績が出された。それは顥原澄子による研究で、戦前戦後の膨大な資料に当たり、レツルや原爆ドームのみならず、広島の復興をも視野に入れた建築史研究となっている³³⁾。

29) とくに、以下の論考はレツル研究に関する資料的側面も大きい(雨野 忍(1997)、菊楽 忍(2012))。

30) 藤森照信(1997a)、同(1997b)。杉本俊多(2012.8)、同(2013.3)。

31) 広島市市民局平和推進室編(1997)、広島県立美術館(2010)。

32) 吉澤玲子(2002)。

33) 顥原澄子(2016)。

(2) チェコにおける言及

レツルの出身地、チェコでの言及は1989（平成元）年の体制転換から10年ほどの時を経て、世紀転換の前後から盛んになった。これは体制転換後の激動が落ち着いたことと、原爆ドームのユネスコ世界遺産登録が弾みになっていると思われる。

2000（平成12）年は、ユネスコの援助を得て、「ヤン・レツル年」とされ、生地ナーホトなどでは10月にシンポジウム等、記念行事がおこなわれた³⁴⁾。このシンポジウムには上述の菊楽ら、日本側からも関係者が参加した。またこの年にはナーホトの文書館資料を編纂した『ヤン・レツル書簡集』も出版されたという³⁵⁾。

2005（平成17）年にはレツルの初期作品であるムシェネーの温泉施設竣工100年を記念する行事が現地で開催された。また上述のオルガ・ストルスコヴァーが監督を務めたドキュメンタリー映像の「ヤン・レツルの軌跡に」の上映会も開催されている³⁶⁾。

2011（平成23）年にはチェコテレビが、過去に外国で活躍したチェコ人を紹介するドキュメンタリーシリーズ「うるわしき足跡」の第1作にレツルをとりあげている³⁷⁾。この番組は日本でのロケを敢行し広島でも取材がおこなわれたが、これも自由化により人の往来が拡大したひとつの証左であろう。

また2012（平成24）年には、19世紀末後半から冷戦期にかけての激動のチェコ史において国外に亡命せざるを得なかったり、国外で活躍したにも

34) “Rok Jana Letzela – 2000” (URL: <http://www.jmc.cz/stan/letzel/>)。なおこの10年後の2010年10月にも記念行事がおこなわれた。

35) チェコ、ナーホト、ゲート出版（菊楽 忍（2012）p. 23）。なおこの書簡集について、筆者は披見していない。

36) “Ve stopách Jana Letzela”（2011年3月2日，URL: <http://www.atelierph.cz/?p=jan-letzel>）。

37) Česká televise（2011. 4. 23）“Šumné stopy: Jan Letzel” 01（URL: <http://www.ceskatelevize.cz/porady/10262550261-sumne-stopy/210522162350001-jan-letzel/video/>）。

かかわらず忘れ去られたりしたチェコ人の伝記を紹介した書籍が刊行され、その中で日本研究家のペトル・ホリー (Petr Holý) がレツルを紹介した³⁸⁾。この論考でホリーはブルノで発見されたレツル作の墓石や、レツルが設計した関口台教会のルルドの洞窟についても触れている。

レツルの故郷ナーホトでは今もレツルに関する関心が継続しており、2015 (平成27) 年末に新たに刊行された『ナーホト人名大百科』には、レツルの項目が記載されたほか、2016 (平成28) 4月には「レツル回顧展」も開催されたという³⁹⁾。

レツルの軌跡を追う作業は、日・チェコ両国で今も継続しているのである。

お わ り に

物産陳列館の竣工から101年、被爆から71年、原爆ドーム保存決議から50年、世界遺産登録から20年目の2016 (平成28) 年5月27日、アメリカ合衆国のオバマ大統領は、先進国首脳会議・伊勢志摩サミットに参加したあと、現職の米国大統領として初めて広島平和記念公園を訪問した。オバマは慰霊碑に献花し、大統領所感をスピーチしたのち、同行した安倍晋三内閣総理大臣とともに元安川河畔を歩き、原爆ドームを見学した。

後の世において「原爆ドーム」として世界遺産に登録された物産陳列館は、およそ100年昔にチェコ人建築家の手によって建てられた。中欧の先進的技術がチェコ人技師によって伝えられ、広島の産業や経済に画期を与えた時代のあったことを、原爆ドームは今に伝えている。生きた建物としての命より、廢墟として残存した歴史の方が長いこの建物は、戦時下の原爆

38) Petr Holý, 2012, “Jan Letzel: Světoběžník, jenž našel zemi, kterou tak dlouho hledal.” *Vzkazy domů: Příběhy Čechů, kteří odešli do zahraničí (Emigrace a Exil 1848–1989)*, Praha, 106–115.

39) “Arch. Jan Letzel (9.4.1880 – 26.12.1925)” (URL: <http://www.atelierph.cz/?p=jan-letzel>). 刊行物の書名は、Encyklopedia osobností Náchoda.

投下という破壊がなければ、広島のに残ることはなかったであろう。その数奇な運命ゆえ、同じく数奇な運命をたどった建築家ヤン・レツルの名前は歴史に刻まれた。

一度は忘れ去られた設計者の名前は、この建物が平和のための記念碑となる過程において、蘇ることとなったのである。

(なお、本稿は2008年度から本学で実施されてきた法学部国際政治学科による授業「広島学」における筆者の分担回の講義ノートをもとに、新たに資料等を加え書き下ろしたものである。)

参 考 文 献

〈刊行物ほか〉

- 朝日新聞広島支局 (1998) 『原爆ドーム』朝日文庫
- 雨野 忍 (1993) 「空間の重層——広島県物産陳列館のデザイン構想」『広島市公文書館紀要』16 : 65-82
- 雨野 忍 (1997) 「原爆ドームの設計者になったチェコ人」広島市『原爆ドーム世界遺産登録記録誌』98-100
- 石田雅春 (2012. 8) 「広島における被爆建造物の保存運動」『建築雑誌』127(1635) : 33
- 市石英三郎 (1968. 10) 「原爆ドームとヤンレツル」『建築雑誌』83(1002) : 14-15
- 穎原澄子 (2016) 『原爆ドーム——物産陳列館から広島平和記念碑へ』吉川弘文館
- 菊楽 忍 (2010. 9. 1) 「広島の顔 食文化に寄与——原爆で消えた奨励館の30年」『中国新聞』
- 菊楽 忍 (2012) 「ヤン・レツル再考——書簡集から建築活動をたどる」『広島市公文書館紀要』25 : 19-25
- 菊楽 忍 (2016. 2. 1) 『建築家ヤン・レツルと原爆ドーム』広島平和祈念資料館パンフレット
- 菊楽 忍 (2016. 5. 25) 「寄稿 チェコで『ヤン・レツル展』『ドーム』設計者 故郷で脚光」『中国新聞』
- 佐藤重夫 (1968. 10) 「広島原爆ドームとヤン・レツル」『日本建築学会大会学術講演梗概集』819-820
- 佐藤重夫 (1969. 3) 「広島原爆ドーム保存工事について」『建築雑誌』84(1007) : 147-148

- 佐藤重夫・椋代仁朗 (1967.10) 「広島原爆ドーム保存工事について」『日本建築学会論文報告集』1016
- 佐藤林平 (1992) 「青島ドイツ俘虜が日本の製菓製パン史上に於て果たした役割——『ユーハイム』の軌跡を中心として——」『武蔵野短期大学研究紀要』6:75-89
- 杉本俊多 (2012.8) 「『ヒロシマ』から考える持続的都市論」『建築雑誌』127(1635):22-23
- 杉本俊多 (2013.3) 「『広島県物産陳列館』(原爆ドーム)の建築様式について」『日本建築学会中国支部研究報告集』36:887-890
- オルガ・ストルスコバ (1995) 『レツルの黙示録』佐々木昭一郎／監訳, 日本放送出版協会
- 汐文社編集部編 (1990) 『原爆ドーム物語』汐文社
- 塚野路哉・千代章一郎 (2013.3) 「戦前の日本近代建築における屋上庭園の形式——明治期から1920年まで——」『日本建築学会中国支部研究報告集』36:891-894
- 中川利國 (2015) 『占領軍資料を中心とする広島市復興顧問と復興計画への一省察』『広島市公文書館紀要』28:29-48
- 広島県立美術館 (2010) 『「広島から広島 ドームが見つめ続けた街」展図録』
- 広島市市民局平和推進室編 (1997) 『原爆ドーム世界遺産登録記録誌』
- 藤田文子 (1969.3) 「原爆ドームの設計者 JAN LETZEL」『建築雑誌』84(1007):11
- 藤田文子 (1969.8) 「チェコ人だった原爆ドーム設計者」『世界』285:186-188
- 藤森照信 (1997a) 『建築探偵 奇想天外』朝日文庫
- 藤森照信 (1997b) 『建築探偵 神出鬼没』朝日文庫
- 村井志摩子 (1997) 『原爆ドーム, ヤン・レツル三部作』カモミール社
- 吉澤脛子 (2002) 『フク・ホロヴァーの生涯を追って——ボヘミアに生きた明治の女』草思社
- Česká televize (2011.4.23) “Šumné stopy: Jan Letzel” 01 (URL: <http://www.ceskatelevize.cz/porady/10262550261-sumne-stopy/210522162350001-jan-letzel/video/>)
- Petr Holý, 2012, “Jan Letzel: Světoběžník, jenž našel zemi, kterou tak dlouho hledal.” *Vzkazy domů: Příběhy Čechů, kteří odešli do zahraničí (Emigrace a Exil 1848–1989)* [“Jan Letzel: Globetrotter who found the country he had sought so long.” *Message Home: Stories of Czechs who went abroad (Emigration and Exile 1848–1989)*] Praha, 106–115.

〈参考 URL〉

- “Arch. Jan Letzel (9.4.1880 – 26.12.1925)”
(URL:<http://www.atelierph.cz/?p=jan-letzel>)

“Architekt Letzel – autor paláce, který přečkal Horošimu.” Dec. 2015

(URL: <http://www.archiweb.cz/news.php?type=arch&action=show&id=18710>)

“Jan Letzel”

(URL: <http://www.archiweb.cz/architects.php?type=arch&action=show&id=2567>)

“Rok Jana Letzela – 2000”

(URL: <http://www.jmc.cz/stan/letzel/>)

“Radovan Lipus: Šumné české stopy v Japonsku I. – Jan Letzel.” Jan. 2011

(URL: <http://www.archiweb.cz/news.php?type=&action=show&id=9656>)

“Vyšší odborná škola stavební a Střední průmyslová škola stavební arch. Jana Letzela, Náchod, Pražská 931 - Historie školy”

(URL: <http://www.voss-na.cz/informace-o-skole/historie-skoly>)